



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan
inside NEWS



●CONTENTS●

21世紀COEプログラム中間評価 最上位にランク! ...	1	学生の活動	
剣祭	3	ボランティア活動(防'z)	23
静岡県立大学の“産学民官”連携を考える集いほか ...	5	剣道大会を開催	25
日本臨床薬理学会年会	7	弓道部が優勝	25
環境学習サポーター養成講座	8	海外インターンシップ体験記	26
著書紹介	8	海外語学研修体験記	27
受賞	9	交換留学体験記	31
研究助成採択	11	アリゾナ大学学部長来学	32
研究室・ゼミ紹介	13	英国自治体関係者が表敬訪問	32
部局の動き		教員の人事	32
国際関係学部	17	はばたき寄金からのお知らせ	33
経営情報学部	19	訃報	34
看護学部	21	谷田風土記	35
		海外臓器移植への募金	35

21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」 文部科学省の中間評価で最上位にランクされる

本学大学院生活健康科学研究科および薬学研究科が提案した「食と薬」を融合した「先導的健康長寿学術研究推進拠点」は、文部科学省「21世紀COEプログラム」の初回公募(平成14年度)に採択され、それ以降、本拠点は活動を積極的に進めてきました。2004年11月29日に発表された「21世紀COEプログラム(平成14年度採択拠点)中間評価について」において、本拠点は5段階評価の最上位であり(公立大学としては唯一)、さらに、数少ない「現段階において順調に進んでいる拠点」の「個別的具體例」の1つとして特記されました。

「21世紀COEプログラム」は、我が国の大学が学問分野毎に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、世界をリードする学術研究を行うとともに、世界に通用する創造力豊かな人材育成を図るため、文部科学省が重点的な支援を行い、国際競争力のある個性輝く大学

づくりを推進する目的で、平成14年度よりスタートした制度です。初年度に採択された大学としては、国立大学とりわけ旧7帝大(北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州の各大学)が占める割合が高い中(43.4%)で、公立大学としては9.5倍の競争率でした[公立大学から4件(3.6%)採択]が、これを突破し、「世界最高水準」の研究教育拠点の形成に向けて支援されることが決定されました。「先導的健康長寿学術研究推進拠点」は、設定された5つの領域のうち「学際・複合・新領域」に属し、我が国における「新領域」研究教育拠点の創成を目指すものです。本拠点は県のファルマバレー、フーズ・サイエンスヒルズ構想と密接な連携を保って推進されるものです。

事業推進項目

①「薬物の効果・副作用」と「栄養状態・食物摂取」の関係性を明らかにするための基礎研究

- ・食品と医薬品の相互作用に関する分子機構の解析
- ・食品と医薬品の相互作用・併用効果の解析

②「食品の生産」と「疾病予防・治療薬」研究の融合的発展

- ・高機能性食品開発のための分子基盤整備
- ・食品成分や医薬品の超高感度機能性評価法
- ・緑茶やその成分のがん、アレルギー、生活習慣病などに対する分子標的研究
- ・環境因子に関する研究
- ・食品成分からの創薬シーズの探索
- ・県が新設した本学創薬探索センターとの連携による医薬品の創成

③人体評価系構築のための技術基盤の確立

- ・食品・医薬品併用時における細胞内分子動態の計量化の実現
- ・生活習慣病などの病態バイオマーカーや酸化ストレスマーカーの検索

- ・新規病原性微生物の探索と感染機構の解析
- ・個人差のもととなる細胞内分子標的の計量化
- ・薬物評価系の開発

④地域保健・医療スタッフとの連携による食品・医薬品臨床応用システムの構築

拠点内に設置された食品・医薬品評価臨床疫学研究部門と拠点外地域保健・医療スタッフとの連携をはかり、臨床応用システムを3つの分科会により構築している。

分科会1：健康福祉行政スタッフとの連携のもとで、機能性食品成分を利用した有効性評価型健康増進実践研究「COE健康増進プロジェクト」の推進
分科会2：管理栄養士および臨床薬剤師等の医療チームスタッフとの連携により、食薬相互作用の臨床データの集積と活用の促進

分科会3：医療機関との共同研究システムを構築し、食薬融合型医薬品の実践研究をおこない、臨床応用バイオマーカーのニーズを基礎研究分野へフィードバック

⑤人材育成のための教育

- ・大学院カリキュラムの充実による国際学会でのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の強化
- ・ティーチングアシスタント制度とポストドク制度の充実と学术交流の促進
- ・国内外の大学や研究機関との連携大学院設置の推進
- ・医薬品と保健機能性食品について、双方の正しい利用方法を助言できるアドバイザースタッフとその指導者の養成

⑥国際会議、研究会等の開催（これまでの主なもの）

- ・静岡健康・長寿学術フォーラム：2002年10月、2003年11月、2004年11月
- ・COEサテライトシンポジウム：2002年10月、2003年11月、2004年11月
- ・USフォーラム・COE研究発表会：2003年3月、2004年3月
- ・世界お茶フォーラム2003「緑茶と健康のサイエンス」：2003年2月
- ・2004国際O-CHA学術会議：2004年11月

統括責任者 学長 廣部 雅昭

事業推進担当者

生活健康科学研究科

(食品栄養科学専攻、環境物質科学専攻)

- 教授 木苗 直秀 (拠点リーダー)
- 教授 伊勢村 護
- 助教授 大橋 典男
- 教授 加治 和彦
- 助教授 熊谷 裕通
- 助教授 合田 敏尚
- 教授 小林 裕和
- 教授 寺尾 良保
- 教授 中山 勉
- 教授 横越 英彦

薬学研究科

(薬学専攻、製薬学専攻、医療薬学専攻)

- 教授 今井 康之
- 教授 奥 直人
- 助教授 菅谷 純子
- 助教授 鈴木 隆
- 教授 鈴木 康夫
- 教授 出川 雅邦
- 教授 豊岡 利正
- 教授 野口 博司
- 助教授 増澤 俊幸
- 教授 山田 静雄

拠点アドバイザー

- 北川 勲 (大阪大学名誉教授)
- 長尾 拓 (国立医薬品食品衛生研究所長)

- 家森 幸男 (WHO循環器疾患予防国際共同研究センター長)



第18回剣祭・大盛況！！

剣祭実行委員会委員長 国際関係学部3年 佐久間 健一

今年も無事に剣祭を終えることができました。これも学内各サークルのみなさん、学生部をはじめ教職員の方々のおかげです。

今年は初日の土曜日にあいにく雨が降ってしまいましたが、2日目は晴天に恵まれ活気ある大学祭が行えました。各模擬店や校舎では大学生と来場者のふれあいが多く見られ、これこそが大学祭のあるべき姿であると感じました。このようなふれあいを、感動と共に伝えられるよう、これからも活動してまいりますので、ご声援よろしくお祈りします。



2日間を通して（推測ではありますが）約5000人の来場者がありました。この



ような、たくさんの方の支援があったからこそ、この剣祭を大成功に納めることができたと思います。

本当にありがとうございました。

また、来年の剣祭にご期待ください。

（概要）

本学の大学祭である第18回「剣祭」が、10月30日（土）、31日（日）に開催されました。

オープニングセレモニーでは、廣部学長の挨拶に続き、静岡若葉幼稚園の園児の皆さんによる鼓笛隊演奏があり、大人顔負けの演奏にセレモニー参加者は驚かされました。

また、剣祭実行委員会委員長が開催の挨拶を行い、くす玉が割られ開会が宣言されました。

学部棟では、「お菓子の家」、「研究室公開」、「骨密度測定」や留学生・日本人学生による「スピーチコンテスト」等のほか、文科系のクラブ・サークル等が活動状況を発表・展示し、多数の方々に参加・見学していました。

ユニバーシティプラザでは多くの模擬店が出店、コミュニティープラザ・体育館でもフリーマーケットや音楽、ダンスなどの各種イベントが行われました。

大講堂ではジャズダンス部、箏曲部の発表会、小講堂では、お笑いライブやアカペラライブのほか学生ネットワークによる企画発表会が行われました。

今年の剣祭は、初日は雨となりましたが、2日間を通じて、学生や教職員、親子連れの家族、高校生のグループなど大勢の人出があり、大成功のうちに閉会しました。



「お菓子の家」製作

食品栄養科学部 4年 武田 水紀

10月30日（土）第18回剣祭の研究室開放において、調理科学研究室では研究内容の発表の他に、『お菓子の家』を製作し、展示しました。

誰もがグリム童話『ヘンゼルとグレーテル』に出てくるお菓子の家に憧れたことがあるのではないのでしょうか？ 私たちも、お菓子の家、それも大きなものを一度作ってみたいと思っていました。

しかし、いざ作ろうと、インターネットで調べてみても、自分が思い描いているようなお菓子の家の作り方は見つからず、結局、自分たちで設計図を書き、クッキーの壁から作り始めることにしました。

壁と屋根はクッキー、煙突はウエハース、ドアはチョコレート、家全体をパンの柱が支えています。粉砂糖と卵白で作ったアイシングで雪が降りつもったように飾りつけをしました。屋根が予想以上に重く、途中家がつぶれかけましたが、いろいろな助言をもらい、なんとか家の土台が完成しました。

後は、たくさんのお菓子（きのこの山・トッポ・小枝・マーブルチョコ・パイ・クッキーなどなど）で飾り付けをし・・・ようやく、構想1ヶ月、製作日数丸3日間、たくさんの人が手伝ってくれた超大作が30日（当日！）の午前4時に完成！！

当日は学生ばかりでなく、一般の方、特に親子連れの方がたくさん見に来てくださり、子ども以上にお母さんが感動してくれる場面もあり、作った甲斐がありました。



なるべく多くの人に見てもらいたいと、次の日も食品栄養科学部棟のホールに展示しましたが、みなさん見ていただけただけでしょうか？

※お菓子の家は後日、みんなで食べました☆

およそ60,000kcal（大人が1ヶ月間に摂取するエネルギーに近い）です。

◆レシピ

- | | | | |
|------|----------|------|----------|
| ・薄力粉 | ・・・ 6 kg | ・粉砂糖 | ・・・ 2 kg |
| ・砂糖 | ・・・ 2 kg | ・ココア | ・・・ 250g |
| ・バター | ・・・ 2 kg | ・食パン | ・・・ 3本 |
| ・卵 | ・・・ 30個 | ・バケツ | ・・・ 2本 |



新潟県中越地震義援金 たくさんのご協力ありがとうございます

剣祭実行委員会では、去る10月30日、31日の2日間に行われた本学大学祭「剣祭」におきまして、大会本部に新潟県中越地震被災者の方々に対する義援金箱を設置し、ご来場の方々へご理解、ご協力を呼びかけました。

多くの方々にご賛同いただいた結果、2日間で28,061円の募金が集まり、11月2日に新潟県災害対策本部へ寄付させていただきました。皆様のご厚意に深く感謝いたします。

なお、剣祭実行委員会企画イベントの収益57,295円につきましても、同災害対策本部へ寄付させていただきましたことを併せて報告させていただきます。

（剣祭実行委員会一同）



「ボランティアサークルこんぺいとう」も新潟県中越地震被災者の方々を支援する目的で義援金の協力をお願いしたところ、15,352円が寄せられました。皆様のご理解・ご協力で深く感謝いたします。また、寄せられました義援金は、早々に日本赤十字社に送らせていただきましたことを併せてご報告いたします。

（ボランティアサークルこんぺいとう一同）

静岡県立大学の“産・学・民・官”連携を考える集い

本学では、従前より産学官連携を社会貢献の大きな柱として位置付けて、取り組みを行ってまいりましたが、次のとおり「静岡県立大学の“産・学・民・官”連携を考える集い」を行います。

本学教員による技術移転事例を紹介し、「特定保健用食品」をテーマに講演会等を行いますので、奮ってご参加ください。

(県立大学ホームページにも掲載してあります。)

○日時 平成17年1月26日(水)

○会場 静岡県立大学

○内容

第1部 研究室の公開(各研究室 13:00~14:00)

研究室を開放し、教員が研究内容等を紹介する。

第2部 特定保健用食品の現状と本学における技術移転成功事例等の紹介

(大講堂 14:10~17:45 定員:300人)

- ・ 県立大学の連携状況報告(産学連携推進委員長 木苗直秀教授)
- ・ 特定保健用食品をめぐる現状と課題(食品栄養科学部 合田敏尚助教授)
- ・ 技術移転成功事例紹介
食品栄養科学部 木苗直秀教授
大学院生活健康科学研究科 山口正義教授
薬学部 石田均司講師
- ・ 県立大学発ベンチャー企業の紹介(環境科学研究所 吉岡寿教授)
- ・ 基調講演(講師:株式会社ヤクルト本社 専務・横倉輝男氏)

第3部 交流会(学生ホール 18:00~19:30 定員:150人)

- ・ 産業界、静岡県、大学関係者等による交流会
- ・ 参加費 2千円



(平成15年度) 静岡県立大学の“産学官民”連携を考える集い より

特許セミナーを開催

大学で「現在取り組んでいる研究内容」又は「一定の結果を出した研究効果」を産業界へ反映させることが、社会貢献に寄与する一つの方法と考えられることから、産学連携推進委員会では、この特許にかかる現状（特に大学における特許の取り扱い）について、主に学内の教員及び学生の方を対象に特許セミナーを開催しました

延べ100名以上の教員・学生が参加し、説明終了後は活発な議論も交わされました。

来年度以降も、引き続き特許に関するセミナー・説明会等の開催を予定していますので、特許に関心のある方、起業することを考えている方は、是非ご参加ください。



- 第1回 10月22日（金） 「大学を取り巻く特許事情」
講師：しずおか産業創造機構 科学技術コーディネーター 横井勝之氏
- 第2回 11月12日（金） 「特許法・特許制度の説明（特に大学向け）」
講師：静岡TLO 技術移転部長 特許流通アドバイザー 小野義光氏
- 第3回 12月6日（月） 「研究成果を特許にするために」と「技術移転について」
講師：静岡TLO 技術移転部長 特許流通アドバイザー 小野義光氏

県立大学の技術相談窓口を“学外”に開設

産業界からの技術相談については、従来より学内において実施していますが、本年5月より、企業等からの技術相談について「出前技術相談」として、相談を受けた企業へ訪問するなど、学外での相談を実施しています。

さらに、11月より静岡市産学交流センター内に「学外相談所」を設置しました。

同センターは、9月に静岡駅北側にオープンしたペガサート内に開設されたもので、官公庁にも近い市内中心部に位置しています。

交通至便で市内外の企業関係者が集まりやすく、相談の拠点に適していることから、今回、このセンター内に「学外相談所」を設け、産学連携の更なる推進を図ろうとするものです。

本学の企業からの技術相談の場として活用していきますので、是非ご利用ください。



- 窓口開設日時：毎月第1、3木曜日の13:00～17:00
- 窓口設置場所：静岡市産学交流センター内
（静岡市御幸町3-21 ペガサート6階）
- 窓口対応者：静岡県立大学産学官連携推進コーディネーター 鈴木次郎
- 相談にかかる費用：無料
- 申込先：（相談日時の重複を避けるため下記へご連絡をお願いします）
静岡県立大学事務局経営課企画スタッフ
電話：054-264-5103



薬学研究科臨床薬剤学講座日本臨床薬理学会年会を運営

薬学研究科臨床薬剤学講座は、2002年に大学院薬学研究科医療薬学専攻が設置された際に開講した新しい講座ですが、日本臨床薬理学会理事会の要請により第25回日本臨床薬理学会年会を2004年9月17-18日に運営し、前日の16日には日本学術会議薬理学研連との共催シンポジウム開催、会期中には日本小児臨床薬理学会と同時期同会場開催、翌日には日中薬理学・臨床薬理学Joint Meeting 開催に協力しました。年会長中野教授による会長講演、2名の外国人を含む4題の特別講演の他、シンポジウムは医薬品安全性分野、臨床試験分野、個別化治療分野の3つの軌道に12テーマが開催され、真剣な討論が続きました。

年会2日目夕方には、「患者のための、患者と共に創る臨床試験システム」の題で患者代表も参加して市民公開シンポジウムが開かれ、「夢の新薬」のテーマで市民参加特別企画が続きました。医療系の3研究室、薬品製造工学研究部の教員、院生、教室配属生も協力し、約1,900名の参加者を迎えて、運営、お世話に当たってくれたおかげで、感謝されて終了しました。



「はばたき91号」4ページの掲載内容の訂正

(訂正記事)

「第110回日本薬理学会関東部会および市民公開講座」の開催報告

(正誤箇所)

誤：小野孝彦先生（静岡県立大・臨床薬剤学教授）

正：小野孝彦先生（静岡県立大・病態薬学教授）

平成16年度「環境学習サポーター養成講座」

環境科学研究所では、環境問題に関する地域貢献と静岡県民への知識普及を目指して様々な活動を行っています。そのひとつに「環境学習サポーター養成講座」があります。これは、一般の方々の環境保全活動を積極的に支援するため、地域の環境サポーターを養成する講座で、平成10年度に開講してから本年度で7年目を迎えました。



今年は9月11日から9月25日の毎週土曜日（全3回）に開講され、約30名の参加者がありました。第1回目と第2回目は、環境NPO法人しずおか環境教育研究会の今永正文氏を講師としてお招きし、「環境学習の基本的概念」、「環境NPO活動の紹介」などについて講演いただきました。また、第3回目は当研究所・岩堀恵祐教授が「静岡県に関連した環境のトピックス」について、主に富士山のトイレ問題や佐鳴湖の水質問題などを取り上げて講演し、参加者の方々は熱心に聴講していました。

本講座は、今回が最終で、新たに「環境科学講座」が開講されます。環境科学研究所では、社会貢献の一環として環境教育、環境啓発のさらなる充実を目標に、今後も力を注いでいきたいと考えています。



本学教員の著書紹介 (『クスリのことかわかる本』)

薬学部 教授 山田 静雄

医薬品・医薬部外品・漢方薬などの定義からはじまり、その効能・効果、さらには健康危害というマイナス面にもメスを入れている。

続いて、医薬品に頼らない医療として、アロマセラピーや音楽療法、食品の機能などについて詳しく説明。

医師、薬剤師など医療現場に携わっている人だけでなく、「自分の健康は自分で…」という意識の高い人にもお薦めの一冊である。

(ビジネス紙「FujiSankei Business i」より引用)

編著者：山田静雄（薬学部教授）ほか

2004年4月1日 地人書館 発行 (2,100円)



受賞

「ボランティアサークルこんぺいとう」が青少年健全育成団体として受賞

「ボランティアサークルこんぺいとう」が、11月13日に開催された青少年健全育成強調月間静岡県大会（静岡県青少年育成会議主催）の席上、青少年団体の部で表彰された。この賞は、日ごろ地域で地道に優れた活動を展開し、明るく住みよい地域づくりに貢献している青少年団体等を顕彰したものである。

こんぺいとうは、2002年3月にメンバーの一人が静岡県難病団体連絡協議会のボランティアに参加したことをきっかけに発足し、現在、35人でボランティアセンターやてんかん協会、養護学校などからの依頼を受け活動しており、更に本年度は、静岡瀬名病院の患者さんとのレクリエーションを定期的に企画・運営し、それらの活動は障害者や高齢者から大変感謝されている。また、大学内においても、これまで個々の対応であったボランティア活動を集約する機関として、情報収集や活動の活性化に大きく貢献している。

現在代表を務める馬部良美さん（国際関係学部2年）は「地道な活動をこのような形で評価していただき大変うれしく思っています。今後もボランティア活動を通じて多くの人々の力になれるよう頑張りたいと思います。」と受賞の喜びを語っており、今後益々の活躍が期待される。

1月には、本年度3度目となる瀬名病院でのレクリエーションを行う予定です。今回は患者さんの部屋を個別訪問し、歌やメンバー作りの小物入れをプレゼントする予定で、現在その作成の真最中です。（写真はその様子）



「生体機能と創薬シンポジウム2004」 優秀ポスター賞を薬学研究科大学院生が受賞

平成16年9月10-11日に開催された日本薬学会生物系薬学部会「生体機能と創薬シンポジウム2004」（日本薬学会生物系薬学部会主催、名古屋国際会議場で開催）、本学薬学研究科博士課程3年、隠岐知美さん（薬剤学教室、山田静雄教授）の発表演題：「In vivo 薬物—受容体結合の動的解析による過活動膀胱治療薬の創薬研究」が優秀ポスター発表賞を受賞しました。一般発表演題の中から、生体機能と創薬シンポジウム実行委員会による厳正な審査を経て、選考されました。薬物の標的となる受容体への薬物の結合動態をインビボで解析し、薬物動態と薬効/副作用の発現と関連づけた新たな創薬研究法を提示したことが受賞理由です。



日本水処理生物学会「第7回論文賞」を受賞

大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻の博士後期課程3年次学生・Truong Quy Tung（トロンクイ トン）君と環境科学研究所の岩堀恵祐教授・宮田直幸学内講師は、日本水処理生物学会から第7回論文賞を平成16年11月11日に授与された。

論文名：Selection of Filamentous Fungi for Treatment of Synthetic Cassava Starch Processing Wastewater Containing Cyanide（シアン化合物含有キャッサバ澱粉製造排水の生物処理を目的とした糸状菌のスクリーニング）

Truong Q. Tung君は、拠点大学方式によるベトナムとの学術交流（地球環境総合学分野：日本側は大阪大学、ベトナム側はベトナム国立大学ハノイ校）により、フエ科学大学から国費外国人留学生（研究留学生）として平成13年10月に派遣された。キャッサバ澱粉製造排水による汚染はベトナムにおける最も重要な環境問題の一つであり、同君が学位を取得し、ベトナムに帰国してから、この問題に対する指導的な役割を果たしてくれるものと期待される。



平成16年度 厚生労働科学研究費補助金 採択状況

【本学教員が主任研究者である研究事業】

研究者区分	部局名	職名	氏名	研究事業名、研究課題名
主任研究者	薬学部	教授	野口博司	研究事業名：創薬等ヒューマンサイエンス研究事業
分担研究者	薬学部	教授	鈴木康夫	研究課題名：変異を克服した画期的抗ウイルス薬の開発
分担研究者	薬学部	助教授	池田 潔	
分担研究者	薬学部	助教授	鈴木 隆	
主任研究者	薬学部	助教授	増澤俊幸	研究事業名：新興・再興感染症研究事業
分担研究者	環境科学研究所	助教授	大橋典男	研究課題名：回帰熱、レプトスピラ等の希少輸入細菌感染症の実態調査及び迅速診断法の確立に関する研究
主任研究者	国際関係学部	教授	石川 准	研究事業名：感覚器障害研究事業
分担研究者	経営情報学部	助教授	湯瀬裕昭	研究課題名：視覚障害者、盲ろう者向け音声・点字コンピュータ・オペレーティングシステムの開発

【他機関の研究者が主任研究者である研究事業】

研究者区分	部局名	職名	氏名	研究事業名、主任研究者、研究課題名
分担研究者	薬学部	教授	鈴木康夫	研究事業名：新興・再興感染症研究事業 主任研究者：国立感染症研究所 ウイルス第三部 部長 田代真人 研究課題名：インフルエンザパンデミックに対する危機管理体制と国際対応に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	野口博司	研究事業名：ヒトゲノム・再生医療等研究事業 主任研究者：国立医薬品食品衛生研究所 筑波薬用植物栽培試験場 場長 木内文之 研究課題名：遺伝子組み換え薬用植物の環境に与える影響に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	山田静雄	研究事業名：食品の安全性高度化推進研究事業 主任研究者：独立行政法人国立健康・栄養研究所 食品機能研究部長 斎藤衛郎 研究課題名：いわゆる健康食品の健康影響と健康被害に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	山田静雄	研究事業名：食品の安全性高度化推進研究事業 主任研究者：独立行政法人国立健康・栄養研究所 食品表示分析・規格研究部 健康影響評価研究室長 梅垣敬三 研究課題名：高齢化社会への対応や生活習慣病の予防を指向した食品素材の安全性・有効性データベース作成
分担研究者	薬学部	講師	加藤善久	研究事業名：化学物質リスク研究事業 主任研究者：国立医薬品食品衛生研究所 総合評価研究室 室長 江馬 眞 研究課題名：内分泌かく乱化学物質（ダイオキシン類を含む）の胎児・新生児暴露によるリスク予測に関する総合研究
分担研究者	薬学部	講師	加藤善久	研究事業名：化学物質リスク研究事業 主任研究者：独立行政法人国立環境研究所 環境健康研究領域 領域長 遠山千春 研究課題名：コプラナー-PCBの非ダイオキシン毒性の識別によるダイオキシン耐容摂取量の設定のあり方に関する研究
分担研究者	薬学部	講師	三宅正紀	研究事業名：健康科学総合研究事業 主任研究者：九州大学 大学院医学研究院 教授 吉田真一 研究課題名：生活環境におけるレジオネラ感染予防に関する研究
分担研究者	看護学部	助教授	奥原秀盛	研究事業名：第3次対がん総合戦略研究事業 主任研究者：静岡県立がんセンター 総長 山口 建 研究課題名：がん生存（Cancer survivor）のQOL向上に有効な医療資源の構築研究

平成16年度 財団法人静岡総合研究機構 学術教育研究推進事業費補助金 採択研究課題と研究代表者一覧

【一般研究助成】

研究代表者	部局名・職名	研究課題
浅井知浩	薬学部 講師	腫瘍新生血管標的化リボソームの腫がん治療への応用
田中 圭	薬学部 教授	カテキン類の生理機能解明を目的とする合成化学的研究
吉成浩一	薬学部 講師	糖尿病に伴う肝薬物代謝酵素レベルの変動機構の解析
河内俊二	看護学部 助手	静岡県下における大規模災害発生時の在宅精神障害者支援システムづくりのための基礎的研究
岩堀恵祐	環境科学研究所 教授	静岡県内の典型的な都市河川・巴川における微生物リスクの実態調査
大浦 健	環境科学研究所 助手	難揮発性有機塩素化合物の生体影響評価に関する簡易スクリーニング法の開発
寺崎正紀	環境科学研究所 助手	環境中に存在する未知環境ホルモン活性物質の同定に関する研究

【学会開催助成】

研究代表者	部局名・職名	研究課題
荒川泰昭	食品栄養科学部 教授	第14回金属の関与する生体関連反応シンポジウム
中山貢一	薬学部 教授	第14回日本循環薬理学会の開催

【大学連携助成】

研究代表者	部局名・職名	研究課題
渡部和雄	経営情報学部 教授	県民及び学生のための大学公開講座コンテンツの同期・非同期配信に関する大学間連携研究

研究助成採択

平成16年度（第36回）財団法人病態代謝研究会 研究助成

研究課題：「新規遺伝子組み換え動物レギュカルチントランスジェニックラットの生活習慣病モデル動物としての有用性とその医薬品開発への展開」

大学院生活健康科学研究科 代謝調節学研究室 教授 山口正義

財団法人日本科学協会 平成16年度海外発表促進助成

研究発表題目：Susceptibility to excitotoxicity of glutamate under zinc deficiency and effect of Saiko-ka-ryukotuborei-to, a herbal medicine, on the excitotoxicity

学会名（開催地）：Society for Neuroscience 34th Annual Meeting (San Diego, USA)

採択者：玉野春南（薬学部医薬生命化学教室客員研究員）

平成17年度 日本学術振興会特別研究員に採択

田中 秀弥 静岡県立大学大学院薬学系研究科博士後期課程2年・生薬学教室

研究題目「トリテルペン合成酵素の機能開拓と超天然型新規生物活性物質の創出」

本人は生物有機化学の領域で今後必要とされながら日本では極めて稀な有機化学と酵素・分子生物学の素養の結合を半ば果たしており、その実績も群を抜いている。今日合成を実施し、遺伝子資源にも目を向け、酵素産物を天然物有機化学の水準で構造決定できる院生はほとんどいない。博士課程において、これらの諸科学の新しい結合のあり方の一つが本人においてなされることが期待される。今後順調に成長して学位取得後は日本の生物分子科学ないしは天然物化学の研究者として極めて貴重な存在となることが期待される。本研究が第122回日本薬学会年会において講演ハイライトに取り上げられ、また、本年度薬学会東海支部大会院生フォーラムの静岡県立大学代表に選抜されたことは、その評価の現れといえる。

平成17年度 科学研究費補助金 応募件数（研究種目・部局別）

(単位：件)

研究種目	部局	薬学部	食品栄養科学部	国際関係学部	経営情報学部	看護学部	薬学研究科	生活健康科学研究科	国際関係学研究科	看護研究科	環境科学研究科	17年度合計	(参考)16年度合計
文部科学省	特別推進研究												
	特定領域研究	領域代表											
		計画研究							1			1	
	公募研究	8	2				1	2			13	12	
日本学術振興会	基盤研究 (S)												
	基盤研究 (A)	一般											1
		海外学術調査											2
	基盤研究 (B)	一般	8	3	3		1		2			17	15
		海外学術調査	1							1		2	
	基盤研究 (C)	一般	23	17	3	5	5	2	2			9	66
		企画調査	1									2	3
	萌芽研究	12	2	2		1		3			2	22	25
	若手研究 (A)												
	若手研究 (B)	11	4	1	2	5	3	2			5	33	25
平成17年度応募 合計		64	28	9	7	12	6	12	1		18	157	141
(参考)平成16年度応募 合計		63	21	7	8	13		8	3		18	141	

(注) 新規応募件数を計上。継続課題は除く。

研究室・ゼミ紹介

大学院生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻 代謝調節学研究室

大学院生活健康科学研究科 教授 山口 正義

本学が開学された4年後の1991年に、大学院生活健康科学研究科は設立されました。食品栄養科学と環境物質科学の2専攻から構成されております。食品栄養科学部を母体とした食品栄養科学専攻の一部の研究室と環境物質科学専攻の研究室は大学院大学としての性格をもち、全国の大学院としてはユニークでありました。その大学院研究室として、開設当初に代謝調節学研究室が新設され、微力ながら小生は研究室を担当させていただき責任を担うことになりました。早いもので今春15年目を迎えることになります。

当研究室は生体調節因子のホルモンによる代謝調節との視点で食品栄養科学的研究と教育に寄与することを目標にいたしました。主に、食品栄養科学部の学生さんに「内分泌学」を講義し、大学院では「代謝調節学特論」を担当しております。研究面においては、小生どもがカルシウム内分泌学的研究の過程で発見・命名した新規蛋白質レギュカルチン (regucalcin) と、そのレギュカルチン研究の中で発見されて命名した新規蛋白質RGPR-p117をめぐる細胞機能調節と病態との関連の解明に力点を置いております。さらに、内分泌代謝学領域にかかわる骨粗鬆症の食品栄養的予防に関する応用研究も展開しております。

この間に多くの学生さんが研究室の同窓の友と



(市内の梶原山公園において)

して社会に飛翔いたしました。これまでに、10名が前述の研究内容で博士号を取得（6名の博士課程修了者と4名の論文博士）し、教育機関や公的、民間機関のリーダー的立場で活躍しております。博士課程修了者の中には2名の中国留学生もおりました（その中の馬 忠杰 博士は米国ペンシルベニア大学医学部で研究員として活躍中）。昨年3月に博士課程を修了した鶴崎美徳博士は、在籍時には「細胞内情報伝達系制御蛋白質レギュカルチンによる肝細胞増殖関連遺伝子発現の制御」の研究課題で、日本学術振興会特別研究員に採用される栄誉を受けました。現在、わが国を代表する研究機関の独立行政法人理化学研究所（和光市）で博士研究員として活躍しております。また、論文博士の研究テーマ「食品因子メナキノンの骨代謝調節機能と骨粗鬆症の予防に関する研究」をもとに、骨粗鬆症を予防する新しい特定保健用食品が開発されました。国際的な高齢化社会における大きな問題になりつつある骨粗鬆

症に起因する骨折と寝たきり予防において、ひとつの役割を果たすことができるものと期待しております。

2004年度の研究室の構成は、助手の澤田夏美博士、博士課程の内山聡志君（2年生）、中川妙子さん（1年生）、修士課程2年生の石田紘一君、深谷優子さん、食品栄養科学部4年生の小林真弓さん、大門由布子さん、研究生の頼 盈伶さん（台湾からの留学生）、並びに客員共同研究員の五十嵐 亜紀博士（中京女子大学健康科学部助手、当研究室の同窓生で2002年度博士課程修了）、タニア アクタルさん（バングラデッシュ）、並びに小生の11名です。開設当初から、少数精鋭のアメリカ式の研究室を目標にして、運営するよう努力しております。

最近の話題として、昨年10月に開催された第77回日本生化学会（わが国の生命科学関連の学会の中では多くの会員数を誇る）では、研究室から6題を研究発表し、そのうち4題がワークショップ演題に選定されました。澤田助手をはじめ院生が大活躍いたしました。なお、1研究室から4題以上が口頭発表に選ばれたのは、学会に演題を申し込まれた全国の大学及び研究機関の僅か84研究室でありました。

また、博士課程2年生の内山聡志君は、「 β -クリプトキサンチンの骨代謝調節機能とその細胞分子機構並びに骨粗鬆症の予防」の研究課題で、平成17年度日本学術振興会特別研究員(DC2)に採用されるとの内定通知（昨年11月）をいただきました。



（昨年11月の大学祭、研究室開放において）

た。これは、日本の食生活に親しまれている温州みかんに高含有する β -クリプトキサンチンに着目した研究で、新しい生理機能を見出すことに成功いたしました。新規保健機能因子として骨粗鬆症の予防と修復に寄与するものと期待されております。これまでの修士課程からの研究業績（関連の論文を8報発表）が評価され、大きな励みになっております。

雑駁な研究室の紹介になりましたが、研究の楽しさと苦しさが変わる研究室の生活の中で得られる内面的なものを大切にしつつ、国際的に活躍する同窓の友が1人でも多く育っていただきたいと願っております。

経営情報学部 岩崎ゼミナール紹介

研究テーマは“マーケティング”

私たちのゼミナールでは、“マーケティング”をテーマに、ゼミ生総勢20名が研究を行なっています。マーケティングとは、「企業などの組織が、いかに顧客を創造し維持していくか」を研究する学問です。岩崎ゼミでは、こうしたマーケティングを学ぶにあたって、机上の学習だけにとどまらず、実践的なものに触れる機会が数多く用意されています。マーケティングの“理論”と“実践”をバランスよく織り交ぜて、その双方からマーケティングの本質を捉えていくことが、岩崎ゼミの特徴です。

実践から学ぶ

ゼミ活動の一つに、毎年前期に行なうビジネスプランニング実習というものがあります。これは、ゼミ生がいくつかのグループに分かれて、共通のテーマに沿ったビジネスプランを作成していくというものです。その際に、自分たちが実際に会社を設立し、経営していくことを想定してプランを練っていきます。具体的には、経営ビジョンの構築からはじまり、コンセプト設定、顧客ターゲット設定、製品開発、プロモーション計画、さらには立地選定といった、マーケティングを理解していくうえで不可欠な要素が盛り込まれており、自ずとマーケティングに必要な知識や考える力が身についていきます。このように、プランを自らが作り上げていくという意味で、まさに“習うより慣れよ”の精神が息づいています。

岩崎ゼミナール ゼミ長 経営情報学部3年 永田 和史

昨年は、SOHO静岡のビジネスプランコンテストに出場し、岩崎ゼミのプランが、学生部門で見事最優秀賞に選ばれました。そして今年は、「学生発！21世紀型お土産ビジネス」というテーマの下、ゼミ内の各グループから様々なアイデアが出されました。その中で、例えば私たちのグループでは、“モノ”よりも“体験”に重点を置き、「旅の中で、お土産となるプチ・タイムカプセルを創作する」といった新たな『体験型お土産ビジネス』を提案しました。そのほかにも、はばたき寄金主催学長企画イベント「創造力啓発コンテスト」で特別奨励賞を受賞した「旅行そのものをお土産にしてしまう」といった斬新な発想のビジネスや、ネーミングがユニークなお土産など、各々の個性が発揮されたプランが多数誕生しました。これらのプランは、清水商工会議所青年部と連携して行った“公開プレゼンテーション”で発表をしましたが、どれも学生らしい斬新なアイデアとして、外部の方々から高い評価をいただきました。

ビジネス・プランが実際の商品開発に結びついたケースもあります。具体的には、「greeb tea (グリーブ・ティ)」という“ケーキのための緑茶”を開発しました。9月から静岡のデパートの洋菓子店で販売されていますが、売行きは好調だそうです。このほかにも、JA静岡市との連携した緑茶カフェの店舗企画、企業との商品開発など、大学外の様々な方々との交流が図れるといったことも、私たちのゼミの一つの魅力です。



清水商工会議所青年部との合同ゼミの風景



洋菓子店で販売中の“ケーキのための緑茶「グリーブティ」”

学びの楽しさを実感

また、こうした外部との交流だけでなく、もちろんゼミの内部の交流も非常に活発です。岩崎ゼミでは、全員で協力して物事を行なう機会が非常に多いので、様々な作業をこなしていくうちに徐々にゼミ生同士の絆が深まっていきます。「岩崎ゼミはみんな仲が良い」といわれる理由は、作業をこなしていく上での障壁や苦難を乗り越えた事実があつてのものだと思います。

また、岩崎ゼミではオフに様々なイベントを行っています。みんなで盛り上がるのが大好きなゼミ生が多く、定期的に様々な会を催します。芝生公園で行うピザパーティーや、歓迎会、夏合宿、バーベキュー大会、忘年会など数多くのイベントがあり、和気あいあいとしたアットホームな雰囲気の中、ゼミ内の交流を深めています。

もちろん、リフレッシュしたら、気持ちを入れ替えて勉強に励むといったON・OFFはしっかりしています。毎年夏に行う合宿はその典型で、今年は伊東・伊豆高原に出かけ、フィールドワークや現地の企業との交流を行う傍ら、ゼミ生・先生間の交流を深めました。

このように、岩崎ゼミのメンバーはゼミ活動に一生懸命取り組んでおり、充実した毎日を送っています。今後とも、ゼミ生一人一人が自覚をもって、ゼミ活動に励んでいきたいと思います。



岩崎ゼミナールのメンバー（ビジネスプラン発表会にて）

国際関係学部の動き

国際関係学部長 稲田 晴年

国際関係学部が語学研修の提携を結んでいるオハイオ州立大学から、9月27日、国際交流担当事務総長ジェリー・ラッドマン教授と、同大学日本研究所の中山教授が本学を表敬訪問されました。両教授は本学副学長、国際関係学部長、国際関係学研究科長等と昼食を取り、歓談いたしました。オハイオ州はホンダの工場を抱え、日本に大豆やトウモロコシを輸出するなど、日本とは経済的にも関係の深い州です。今回も州知事が80名の使節団と共に日本を訪れ、日本各地を精力的に訪問するとのことでした。ラッドマン教授によれば、「オハイオ州立大学には薬学部もあるので、薬学部学生の留学も歓迎する」そうです。日本の学生が米国に留学する場合、英語が大きな障害になります。しかしオハイオ州立大学薬学部では、留学する前の外国人学生にインターネットで実際の講義を体験させ、英語での講義に慣れさせる予備授業を提供しています。この件に関して興味のある方は、オハイオ州立大学ホームページをご覧ください。

国際関係学部は海外の様々な大学と交流協定を結んでいますが、残念なことにヨーロッパではイギリス以外の国に協定校がありません。本学部の地域言語にヨーロッパの言語としてフランス語、ドイツ語、スペイン語が含まれていることを考えれば、これらの言語を現地で学ぶための協定校はぜひとも必要です。現在、フランスのリール政治学院との協定を計画していますが、最終的にはドイツ、スペインにも協定校を作るよう努力したいと思います。また、現在の協定内容は語学研修が主であり、本学部の学生を海外に送り出すことに重点が置かれています。海外から学生を招くのは、モスクワ国立国際関係大学およびフィリピン大学との協定のみに限られています。これでは真の国際交流とはいえません。今後は様々な国から多くの学生を招き、本学のキャンパスで多様な言語が飛び交う環境を作り出すべきでしょう。



平成18年度より、センター試験の英語にリスニングが追加されることになりました。ただし、受験生にリスニングを課すかどうかは個々の大学の判断に任されています。本学部個別学力検査の英語問題に対しては、あまりにも文法と読解に偏りすぎているという批判が聞かれますので、本学部ではリスニングを取り入れることにいたしました。また、この機会に、個別学力検査の英語問題が従来のものでよいかどうか、受験生の負担を軽くする方向で見直しをする予定です。



本学部の大学院には現在修士課程しかありませんが、博士課程進学を希望する学生もあり、また、学部全体の教育・研究水準を上げるためにも、博士課程の設置は欠かせません。このため、平成18年度開設を目指して、博士課程設置申請の準備を進めています。博士課程設置に伴い、本学部もさらに発展することと思います。



経営情報学部動き

経営情報学部長 勝矢 光昭

「情報」の重要性が高まる中、デジタルカメラや携帯電話が爆発的に普及している。中高年の教員の多くは携帯電話の操作もおぼつかないが、学生達は皆驚くほど上手にそれらを使いこなす。「情報」のことは特別に深く理解していなくても「IT機器」は使いこなせる時代である。

経営情報学部の学生の多くは入学時、自分の将来について明確なビジョンを持っていない。彼らの多くは理性的・客観的に考えないで勘に頼って行動する傾向にある。しかしそれはことさら責められることではない。若者の勘は鋭く、それはそれで貴重である。考えようによっては18・9才の学生が自分の将来の職業まで見据えて行動するのは、どこか打算的な匂いがする。それよりも、もっと漠然とした抽象的な将来を夢見るのは自然なことである。問題なのは、多くの学生達は携帯スキルは完全にマスターしたかも知れないが、それ以外のコミュニケーションスキル（言語・言葉）のマスターは未熟なように見受けられることである。言語や言葉は「思考」の媒体であるから、このような事態は深刻である。豊富な言語・言葉を持てばコミュニケーションできるとは思わないが、それがなくてコミュニケーションできる筈がない。

・ スチューデントファーストのカリキュラム

このような最近の学生気質を認識し経営情報学部では平成15年度よりカリキュラムを大幅に見直した。新たに編成し直したカリキュラムでは「日本語の力をつける」、「英語の力をつける」、「コンピュータの力をつける」、「コミュニケーションの力をつける」に力点が置かれている。このため、ゼミ配属時期を従来の4年次から3年次へ変更した。そして1・2年次でゼミ形式の基礎演習を開講した。これらの改革で学生とゼミ教員との活発な交流促進を図り、学生達がコミュニケーションスキルを身につけながら、4年間の有意義な大学生活を通じて、個性・創造性・チャレンジ精神に溢れた自分の具体的な将来像を醸成できるよう、学部全員が支援している。



・高校教職免許（数学・情報・商業）申請

経営情報学部が開学以来大切にしてきた経営・数理・情報のカリキュラム体系は堅持されている。そのおかげで、今年9月、数学・情報・商業の3教科について高校教職免許申請ができた。教員数わずか27名の組織で3教科もの教職免許申請は稀有である。教職コースは各教科とも5名の学生定員を置いて来年度から発足予定である。

・高校教職専修免許（情報・商業）申請

学部の教職免許申請と同時に研究科でも情報と商業の2教科について高校教職専修免許の申請をした。これにより情報や商業の高校教職免許取得者が研究科で更に専修免許取得を目指す道を開いた。

・研究科の昼夜開講制

研究科は今年度より昼夜開講制に踏み切った。昼夜開講制では研究科の授業は、平日は午後・夜間、そして土曜日は午前・午後開講される。この制度により社会人が仕事を続けながら、大学院で学び、修士課程を修了できる道を開いた。この効果は平成17年度の大学院入試で、社会人の入学志願者の増加となってさっそく現れた。この制度の運用が外国人留学生や4年制大学の卒業生に対してデメリットをもたらさないよう配慮されるのは当然である。

・地域経営研究センター設立

地域経営研究センターは、地域の諸問題の解決

策提言、社会人学習プログラムの開発と実施を目指して今年度設立された。静岡県の要請に応じて既に沼津エクステンションセンターで年間9科目のビジネス講座と、谷田キャンパスで年間5科目のNPO講座を開講している。このほか駿河銀行をスポンサーとするベンチャービジネス寄付講座、そして鈴与をスポンサーとするマーケティング寄付講座が静岡駅南口のエスパティオ7階（株）フレームワークス大会議室で平成17年1月より開始される。

・遠隔教育設備の設置・利用

静岡県の遠隔教育システムは経営情報学研究科が静岡県の要請に応じて設計したものである。静岡県はこのシステムを、ぬまづ産業振興プラザ（沼津市）、静岡文化芸術大学（浜松市）、ペガサート（静岡市）の3ヶ所に設置した。このシステムはビジネス講座で沼津—浜松、沼津—静岡を結んで既に運用されている。今後このシステムをより有効に利用できるよう、県内大学間連携組織「大学ネットワーク静岡」による公開講座、県立大学公開講座あるいは静岡大学公開講座等のコンテンツをデータベース化する計画を進めている。



看護学部・看護学研究科の動き

看護学部長 木村 正人
看護学研究科長 佐藤 登美

医学がこれほどに急速に進歩した20年間はおそらく今までなかったことと思います。進歩が本当に人類の幸せに貢献するという意味での進歩なのかどうかは歴史の検証に待つしかないことでしょうが、医療の一翼を担う看護がこの急速な変化から無縁でいられるわけはありません。私達県立大学の看護学部はこの変化のまっただ中に生まれ、成長してきました。

医学が鋭い鋏(やじり)を持って切り裂きつつある現代でも、多くの人たちはこれまでと変わらないごく「普通の」病気で倒れ苦しみ、日々のストレスから引き起こされる体調の不調から逃れようと助けを求めています。科学の世界で真実が明らかになっていくにつれ、日常の生活は、かえって混沌へと導かれていくかのようにも思われます。

このような時代の看護教育にとって4年制学部の存在の希少価値が消えつつあるというのは偶然ではないように感じます。この時代を生き延びて行くには、それだけの深い知識とそれを縦横に使いこなす智慧を要求されているのだと思うからです。



1 学部概況

在籍学生数などの概況から申しますと、学部学生数251名、研究科学生数13名です。学部はこれまで4回の卒業生(233名)を送り出し、研究科では平成16年3月に第2期生8名が修了し、昨年度と合わせ13名の看護学修士が誕生したことになります。

15年度卒業生の国家試験合格率は看護師が100%、保健師が93.5%、助産師は100%と、看護師、助産師が全員合格したことは特筆に値するものです。就職状況では、15年度卒業生56名は学生の臨地実習関連病院など看護師および助産師としての就職がそれぞれ43名(76.8%)、7名(12.5%)、県や市町村へ保健師としての就職が6名(10.7%)で、就職率はこれも100%でした。また、開設以来高い志願率を維持している社会人および編入学選抜では、本年もそれぞれ7.5倍、12.2倍の高倍率となりました。編入学試験ではこの制度への臨床現場や社会的ニーズの高いことを考慮し、入学定数を改訂し、平成18年度入学者(来年行われる入学試験)より10名となり受験生にとってこの制度がさらに活用しやすくなります。

2 よりよい学生を求めて

少子化の波に看護学部も影響されないわけにはいきません。それに打ち勝って、優秀な学生に集まってもらうために、学部としては高校生に対して積極的に看護学のおもしろさ、「人間学」としての魅力を知ってもらおうという考えの下、オープンキャンパスの内容の見直し、高大連携における出張授業への積極的な参加などに努力してきました。オープンキャンパスでは例年好評の在校生の説明の他に卒業生にも参加してもらい看護に対する理解を深めてもらいました。また、学内の実習施設の開放は多くの参加者の好評を得ています。

入学後は、緊張した面持ちの新入学生のところをほぐし、学部生活に早くなじみ、学生同士のみでなく、学生と教員とのふれあうことを目的とし

て、学部オリエンテーションを学外施設を借りて1泊2日で行う試みも今年で3年目になりました。今年も三保で開催されたオリエンテーションではこれからの抱負を発表するグループワークなど和気あいあいの内に大きな成果を上げることができました。ちなみにこれに関わる経費は看護学部後援会の援助によるものです。

3 研究と教育

看護学部における研究はそのフィールド（場）が重要な要素を占めています。付属病院を持たない看護学部の弱点として研究の“場”をゼロから作ることから始めなくてはなりません。開設後、学生の臨地実習を指導しながら教育と研究の“場”を開拓し、その体制も整ってきました。実習施設としては静岡県立総合病院、こども病院、こころの医療センターの県立3病院を始め、西は島田市、藤枝市、東は修善寺町や長岡町までの広い範囲の多数の病院、保健所、保健センターなどの協力を受けておこなっています。また、来年度からは東部地区の医療の最大の拠点となった県立静岡がんセンターでの実習も開始される予定です。

4 社会との接点

社会への貢献という視点で大学をみることの重要性が強調されてきています。看護学部の場合は職能集団としての看護職の人たちとともに問題を解決していく活動も活発に行われ始めています。例えば、成人看護領域による緩和ケア病棟における家族のサポート、小児看護領域による家族看護研究会、精神看護領域による精神看護事例検討会、臨床心理学教授による発達障害児の療育・教育に



関する研究会及び発達障害児を抱えた家族を対象にしたサロンなどが挙げられます。

また、学生主体の災害時の救護のためのボランティア活動グループ「防’z」の活動や学部の助手を中心に作られている健康増進研究会による剣祭当日の骨密度測定イベントなど、毎年行われ、地域に根付いた活動も例年どおり行われました。

5 カリキュラム改正作業

18年度4月より、前述した社会の変化などに柔軟に対応、社会から期待される高度な看護実践能力を持った看護職を育成する教育を目指した新カリキュラムを発足させる予定で、現在精力的に活動をしているところです。カリキュラム改正は学部の理念からの根本的な見直しを行い、大幅な変更になることが予想されるために、拙速をさけて2年近くの時間をかけて、じっくりと熟成したものを目指しています。

6 研究科の動き

平成16年4月よりカリキュラムの一部改変を行い、また県立がんセンターとの連携大学院協定を結ぶなどして、教育・研究のより一層の充実を図りました。専攻領域は「保健・医療システム学」「看護管理学」「成人・老人看護学」「小児看護学」「母性看護学」「地域看護学」の6領域で構成され、研究科内の雰囲気は、臨床経験や様々な社会経験のある学生の入学によって、個性的でにぎやかな集まりの中で、学究的なゼミナールやプレゼンテーションなどが行われています。

ボランティア活動

防災ボランティアサークル「防' z」

代表：看護学部2年 伊東 慶

防' z（防災ボランティアサークル）は、看護学部の学生・教員を中心に学生、教員、地域住民に対し防災に関する知識、技術（心肺蘇生法、包帯法などの応急処置）の普及に努めています。

一年間の活動は、6月の消防署職員による初期救命法講習会、10月の学内防災訓練での心肺蘇生法講習会、12月の地域防災訓練への参加です。

12月の防災訓練は、前述した「防災に関する知識、技術の普及」のほかに、災害時に向けて大学と地域住民との連携を強化する目的もあります。さらに大学生の地域貢献として、地域防災訓練には特に力を入れています。

6月の初期救命法講習会は、現在は看護学部生中心に行っていますが、今後は他の大学関係者や地域の方々も参加できる企画にしたいと考えています。学内者や地域住民で、「初期救命法に興味はあるがキッカケがない」という人が、受講できる機会も設けたいと思っています。

これらの活動の他、平成16年度は「大阪でのNHKラジオ出演」、「新潟へのボランティア参加」を行いました。

ラジオは、平成17年1月で阪神大震災後10年ということで、阪神・東海地区の大学生（震災経験者、防災関係者）が集まり、もう一度震災を思い出して震災から何を学んだかを話し合いました。

新潟へのボランティア参加は、代表である自分と1年生の鈴木智勝君が静岡県ボランティア協会主催のボランティア活動に、11月2日から1日半、参加しました。この経験から、震災の状況、震災時のボランティア活動を具体的に知り、今後の活動を考えることができました。しかし、短期間のボランティア活動では限界があることも感じました。

以下、新潟でのボランティア活動を通して見たこと、感じたことです。

同行したボランティアの方々は炊き出し、避難場所の掃除を主に行いましたが、自分達が行ったボランティア活動は、長岡市内の被害の大きい寺の本堂の片付けでした。本堂は土壁のいたるところが崩れ、床が大きく抜け、建物全体が傾いてい



復興を手伝ったお寺の外部

るため、引き戸を閉めることもできない状態で、震災の跡が生々しく残っていました。

新聞報道等では、被害の大きいところばかりがクローズアップされていますが、市の中心部では、瓦が落ちている民家は多少ありましたが、目に見える震災の爪痕は非常に少ないのが実態でした。しかし、中心部から車で10～15分走れば、テレビで見た地割れやマンホールが飛び出していました。車が通行できない道路もあり、通れても段差が多く、車はしょっちゅう跳ね、普通の道だったものが地震で悪路に変わっていました。

最終日には、山古志村の方々の避難場所である長岡県立明德高校の体育館を見学させていただきました。明德高校は、授業を再開している高校生と、避難している人々の共同の生活場所になっており、普段の日常に近い生活を送っている高校生と、完全な非日常状態である避難している方々のギャッ

プが激しかったことを憶えています。

避難している人達の中にも違いがありました。強く印象に残っているのは、炊事場で働くなど何か自分の仕事を持っている人達と、外でタバコを吸ったり、特にすることもなく体育館内でテレビを見ていたりする人達の表情の違いです。簡潔に言うと前者が生き生きしているのに対し、後者は落ち込んでいる感じでした。



復興を手伝ったお寺の内部

体育館内は一見整理されているように見えました。しかし、一人一人のスペースは小さく、プライバシーについて配慮できる場所ではありません。さらに、朝食直後に行ったためだとは思いますが、人が常に動き回り、テレビやラジオは音量が大きくつけっぱなしの状態でした。テレビやラジオは、情報を常に入手できるようにという考えのためかもしれませんが、静かに休みたい人は休まず、調子の悪い人は症状が悪化する可能性が大きくなると感じました。

小千谷市の体育館にボランティアに行った人からの話によれば、食べ残しが2、3日放置されていたり、体育館内での排泄物の処理が必要だったりと、衛生状態は非常に悪いようでした。

これらの体育館の状況から避難生活を考えると、絶えず人が動き回り、歩く人の振動があり、テレビなどがつけっぱなしで騒がしく、人がゆっくりと身体を休めることはとても難しい環境といえます。さらに、一人当たりの割り当て面積が狭いため、プライバシーを守ることも難しく、他人のため迷惑をかけないように常に気を配りながらの生活のようです。このような厳しい状況での生活の上に、時々余震が襲うため、気の休まる時間が少ない日々を送っていると思いました。

以上が防' zメンバーとして、そして看護学部生として被災地（一部）を見て気づいた点と感想

です。実際に行ってみないとわからないことばかりでした。避難場所の様子などは、その場の空気を直接吸う必要があります。そして何が問題か、改善点は何かを感じ、考え、学んでいかなければ防災に生かすことはできません。東海地震が想定される静岡県に住んでいる私達にとっては、決して他人事ではありません。震災などというものは、起こってほしくないものですが、今回のボランティア参加を通して、地震が起こった時に何ができるのかを学び、準備しておく必要性を改めて教えられました。

今回のボランティア参加で学んだこと、感じたことを、防' z代表として、看護学部生として、これからの防' zの活動に活かしていきたいと思っています。

静岡県は東海大震災が来ると20年前から言われていますが、対策期間が長く、実際にまだ起こっていないために、防災意識はあるものの、その準備や応急手当などの技術習得がおろそかになってきていると思います。このような技術を学んだり、新潟でのような状況に対応するための「防' z」とも言えます。防災ボランティアサークル（通称：防' z）はそういった意識のある方に気軽に参加して頂けるサークルですので、興味のある方は是非ご参加下さい。



第58回 関西薬学生連盟剣道大会開かれる

剣道部顧問（薬学部教授） 鈴木 邦夫

8月21日（土）・22日（日）の2日間に渡って第58回関西薬学生連盟剣道大会が本学体育館で開かれました。本大会は第58回という、重い歴史を持つ大会ですが、今年は本学が主管校として大会の企画・運営に当たりました。第48回の本大会と平成14年11月の第31回東海薬学生剣道大会の開催に次いで3回目の主管校の役目を果たしました。

参加校は大阪薬科大学（14名）、京都薬科大学（9名）、近畿大学（14名）、岐阜薬科大学（5名）、神戸薬科大学（11名）、静岡県立大学（19名）、名城大学（41名）の7校で計113名の選手が一堂に会し、日頃の鍛錬の成果を競い合いました。試合は男子団体戦、女子団体戦、新人戦、男子および女子個人戦の形式で行なわれました。

本学選手団は大会の運営に当たりながらの試合出場、試合のみに没頭するわけにもいかない状況のなかで、男子団体戦準優勝の成績をあげました。



第48回東海学生弓道秋季リーグ戦女子の部 IV部Bブロック優勝

静岡県立大学弓道部
（国際関係学部3年 折笠 綾子）

2004年の9月～10月にかけて、第48回東海学生弓道秋季リーグ戦が行われました。

今年的女子リーグでは、静岡県立大学はIV部リーグBブロックに位置し、4つの大学と対戦しました。

わずか3人の団体戦でも、少ない部員から調子のよい選手を出すことは難しいことでしたが、皆で協力しながら全ての試合を勝ち進むことができました。

このIV部Bブロック優勝は、選手の頑張り、選手以外の部員や先輩方の応援で勝ち取ったものです。Ⅲ部との入れ替えには手が届きませんでしたが、来年は昇格できるよう頑張ります。

みなさんありがとうございました。



中国でのインターンシップ

国際関係学部 3年 西原 由佳

今年8月、私たち静岡県立大学国際関係学部の学生7名(うち中国人留学生1名)は、中国に進出した日系企業である「中国友成公司」にて約1週間、インターンシップ(就業体験)を行ないました。

● インターンシップ実現まで

「インターンシップをしよう、しかも中国で!」という今回の企画は、私も所属する“学生ネットワーク(現、Dream Seeds)”というサークルが独自に立ち上げたものです。

私は以前から中国に興味があり一度訪れてみたいと思っていました。伝統的な文化にももちろん興味はありましたが、私は特に中国人の普段の生活や中国製品などに興味があったため、工場で工員の方に交じって働く体験ができるという今回のインターンシップへの参加を決めました。

● いざ、インターンシップ!

今回インターンシップをさせていただくことになった「中国友成公司」では、主に自動車や家電製品などの部品を製造しています。私たち7人はその製造工場で、工員の方に交じって部品の製造や不良品チェックなどの作業を行いました。

周りの工員の方はもちろん皆さん中国人で、最初は言葉もほとんど通じずにとまどいました。ですが筆談やジェスチャーなどを駆使し、徐々にコミュニケーションをとれるようになっていきました。

工員の皆さんはとても親切で気さくな方ばかりで、デパートに買い物に連れて行っていただいたり、夕食にも招待していただきました。こういった日常生活にお邪魔することは普通の観光旅行ではなかなかできないことであり、就業体験とともにとても貴重な経験になりました。工員の方の手料理、とっても好吃(ハオツウ)でした!

● インターンシップを終えて

今回のインターンシップは私にとって、海外に出るのも中国を訪れるのも工場で働くというのも、全てが初めての経験ばかりでした。そのような中で、今回一緒に参加したメンバーにはいろいろ迷惑をかけてしまったと思います。ですが、このインターンシップを通してとても大切な仲間ができたことは大変うれしく思っています。また企業の方々や工員の皆さん、その他この初めての試みにご協力いただいた方々全員に一言…太謝謝了!



(右から2人目が西原さん)

オハイオ州立大学夏期語学研修

今年の夏、静岡県立大学とオハイオ州立大学が提携した3週間の夏期語学研修（SSEP）とインターンシップ（SLIP）の2つのプログラムが実施されました。そこで経験したこと、感じたことについて3名の参加者に話を伺いました。

<SSEPに参加して>

3週間の静岡夏季英語プログラムで最も忘れられない経験になったのは、週末のホームステイです。研修中は大学の寮で寝泊りしていたのですが、2回あった週末のうちの1回を、現地の方のお宅で過ごさせていただきました。私が伺った日はちょうどアテネオリンピックの開会式の日で、日本からお土産に持ってきた日の丸の扇子をホストファーザーに手渡した瞬間、テレビで日本選手団の入場行進が映し出され、二人で大笑いするというエピソードもありました。

土曜日の夜に、ホストファーザーに頼んでジャズのコンサートに連れて行ってもらったことは、とりわけ楽しく、印象的な出来事でした。演奏はもちろんすばらしかったのですが、聞いている人たちの乗りのよさには本当に驚きました。演奏者と聴衆が盛り立てあって大きなうねりを作っているというアメリカの人々の音楽に対する心意気を、肌で感じることができました。

今回の研修は、私にとっては大きなチャレン

ジでした。当時の日記やノートを読み返してみると、いかに必死になって1日1日を送っていたかが思い出されます。何とかしようと奮闘してきたことは、貴重な財産になってくれるはずですが、私が毎朝英文の音読練習を続けていられるのも、オハイオでがんばってきたからだと思います。研修中支えてくださった多くの方々に、心から感謝いたします。

（国際関係学研究科 修士課程1年 大胡田 裕）



私はオハイオの研修で本当にすてきな友達に出会いました。1人はConversation PartnerのKellyです。Conversation Partnerとは、授業の後や休みの日に話をしたり宿題を手伝ってくれたりするパートナーのこと。彼女は忙しいにも関わらず、ほぼ毎日私との時間を作ってくれました。宿題やリサーチプロジェクトを手伝ってくれただけではありません。時には映画や野球の試合を見に行ったり、彼女の家で一緒にクッキーやケーキを作ったり。さらにIrish Festivalというお祭りや動物園にも連れて行ってくれました。大抵、Kellyは私と会う時に彼女の友達を何人か連れてきてくれます。その度に一人、また一人…と多

くの友達ことができました。そして私が積極的に英語を話せるような雰囲気をも作ってくれました。お互いの文化や家族のこと、恋愛の話—本当にいろいろな話を一緒にしたKelly。来年、彼女が日本に来てくれる日が今から待ち遠しいです。

そしてもう一つ、このプログラムの参加者9名とも仲良くなれました。もともと学部や学年が様々で、研修前までは互いのことをよく知らなかった私たちでしたが、毎日寮で生活するなかで仲良くなっていきました。参加者のみんなは私にとっても良い刺激を与えてくれました。自分の目標をきちんと設定し、それに向かって寮に帰った後も英語の雑誌を読んだり、互いに発音練習をしたり

する意志の強い人。アメリカの文化や習慣をどんどん吸収しようと、様々なことにチャレンジする意欲的な人。本当にすごい！そんなみんなの姿から私自身も多くのことを吸収したと思います。

この場を借りて、みんなに「ありがとう」。3週間本当に楽しかったです。

(国際関係学部 国際言語文化学科4年 田野 晶子)



.....

<SLIPに参加して>

8月2日から20日までの3週間、アメリカのオハイオ州立大学付属英語研修機関(通称ALP)で教育実習を体験しました。現在では多くの大学でさまざまなインターンシップが行われていますが、教育実習的なインターンシップは私の知る限り例がありません。今年度から本大学でスタートしたShizuoka Language-teaching Internship Program(通称SLIP)は、その先駆的役割を果たしていると言えます。SLIPでは、最初の2週間は主に授業見学とティーチングプラン作りをし、最後の1週間で授業を実施しました。日本語母語話者に英語を教えるのとは異なり、さまざまな母語を持つ学習者に英語を教える手段は英語でしかありません。インターンシップを終えて、英語を英語で教授することに対し自信を得ることができました。

また、SLIPに参加して学んだことは、「自己投資」の必要性です。SLIPを体験し、英語教授に必要な知識や多くのスキルを吸収することができました。研修を終えた今は、自己投資した以上のものを得ることができたと実感しています。そして、今回の研修で得た知識やスキルを来年

度から英語教授の場で実践にうつして初めて、この研修の真の成果が得られるのだと考えています。これからの課題は、自己研鑽を重ねることはもちろんのこと、研修で得た多くの知識やスキルを整理整頓し、授業において必要な時にそれをすぐに取り出せる多くの引き出しを準備しておくことです。最後に、このような機会を私に与えてくださった静岡県立大学の関係者の皆様、ならびにオハイオ州立大学の関係者の皆様にこの場をかりてお礼を申し上げます。

(国際関係学研究科 修士課程2年 斎藤 敬子)



浙江大学での語学研修を終えて

国際関係学部3年 川口 結加

2004年8月29日（日）P.M.1:40、私たち15名は語学研修というより、むしろ修学旅行に行くようなにぎやかな雰囲気の中、名古屋空港を出発した。学年が2～4年と様々であったため、名古屋空港で初めて顔を合わせた人も何人かいたが、お互い全く人見知りすることなく、すぐに打ち解けて仲良くなれたことがまず、この語学研修を楽しむことが出来た要因の一つだと思う。

上海空港で先生と合流し、滞在先である杭州に向かうバスの中から私たちの留学は本格的にスタートし、それと同時に私たちにとって最高の25日間の幕開けであった。

誰もが海外に行って自分の知らない異文化を目の当たりにすると、少なからずカルチャー・ショックを感じるものである。中国においても例外ではなく、特に印象が強かったのは、日本ではおそらく警察に捕まると思われるような横暴な車の運転や、広い道路・狭い道路に関係なく、走っている多くの車と車の間をいとも簡単にすり抜ける中国人の姿である。また、それとは逆に、中国に来た当初から何の苦勞も無く受け入れられたもの、



(上段中央が川口さん)

それは「食事」である。日本で目にする中華料理とは全くといって良いほど相容れていたが、初めて食べる本物の中華料理に私たちは毎日心を躍らせていた。今思えば、毎日毎日何か珍しいものが出される度に、「おーっ！」という歓喜の声私たちがテーブルからこだまし、その度に食堂のウェイトレスが嬉しそうな笑みを浮かべていた。

私たちが通った浙江大学はいわゆるマンモス校で、キャンパスがいくつもあり、大学内を散歩するのも規模が大きすぎて一苦勞であった。学校では初めての「3時間まるまる中国語」の授業だったので、最初は全く聞き取れず、先生に申し訳ないくらい手間を取らせてしまっていた。しかし先生は嫌な顔ひとつせず、根気強く私たちに指導してくれた。その甲斐あってか、少しずつだが私たちが理解できるフレーズが徐々に増えていった。また、先生は私たちと同年代の中国人学生との交流の場を設けてくれ、彼らと雑談をしながら会話をすることで、私たちの語学力は自分でも驚くぐらい伸びていった。これは、中国人学生が私たちが気遣って、ゆっくり話してくれたり、わざわざ紙に書きながら説明してくれる姿がとても印象的で、彼らの努力に応えるべく、私たちが独自の方法で中国語を勉強したことがきっかけであった。この独自の方法というのが実に興味深いもので、あるグループは寮で働いている人たちと他愛もない話で毎日盛り上がり、あるグループは買い物先で出会った店の店員さんと値段交渉ついでに世間話をし、またあるグループは大学で出会った中国人学生と一緒に遊びに行き、さらに別のグループは中国語の本を読んで単語量を増やし、別の場で実践



(浙江大学 外観)

していた。このように中国語を勉強する方法はグループによって様々であったが、私たち全員の目標である「中国語が上手になりたい!」ということは共通していたため、それぞれがそれぞれの方法で、尚且つ楽しみながら語学力を伸ばすことが出来たのだと思う。その結果として、当初聞き取れなかった言葉もなんとなく理解できるようになり、紙を使わなくても会話が出来るまでに成長したのである。

私はこの25日間で多くの素敵な出会いをした。それは単なる偶然であったが、私にとっては、この25日間の中国滞在において、なくてはならない必然の出会いだった。たまたま大学の構内で出会い、昨年日本に留学していたバングラデシュからの男子留学生や、写真屋を探していて道を尋ねてきた大学を卒業したばかりの女性、インターネットカフェでたまたま隣に座り、中国語と英語交じりで会話をしたコンピューター関連の仕事をしている男性など……。彼らにはもう会うことはないのかもしれないが、本当に貴重な『一期一会』の縁であった。さらに私の周りには、同じ寮に住んでいたアメリカ・韓国・日本などからの留学生、いつも話に付き合ってくれた寮で働く人々、大学で交流を深めた中国人学生たち、旅行先のガイドさんなど多くの人たちが私を温かく見守り、そし

ていつも笑顔を与えてくれた。そして忘れてはならないのが、同じ日本から出発し、25日間を共に過ごした14人の仲間たちの存在である。楽しいことも悔しいことも全てを打ち明けることが出来、共に共感し合えた最高の仲間たちである。この14人の存在なくしては、私の中国留学は楽しいものにはなり得なかったといっても過言ではないだろう。本当に多くの人々に感謝の念を感じる25日間であった。

自分が外国に行き、異国の地での生活を体験して初めて日本に来ている外国人の大変さが身に染みて実感できる。彼らの気持ちが理解できるからこそ、本当の意味で優しくなれる。これがまず国際人になるための第一歩であるように思う。もちろん外国人だけでなく、全ての人々に対しての優しさや気遣いの大切さを、私はこの25日間で最も学んだように思う。そして、今度彼らに会う時までには、胸を張って何かを報告できるよう、私は自分の目標に向かってこれからも努力していきたいと思う。



モスクワ国立国際関係大学交換留学体験記

国際関係学部4年 田畑 睦美

今年の8月末から10月半ばにかけて、私はモスクワ国立国際関係大学(略してMGIMO)で留学生として学んできました。1ヶ月半という短い期間でしたが、他では体験できないことばかりありました。

8月27日の夕方に、私はモスクワの空港に降り立ちました。待っていた大学のスタッフが私を寮まで送ってくれました。案内された部屋にはすでに一人の日本人留学生が住んでいました。彼女はペリメニという、餃子そっくりのロシアの伝統的な食べ物を、私に用意してくれました。その夜は疲れて9時くらいに寝てしまったのですが、驚



(右側が田畑さん)

いたことに、その頃まだ空には日がありました。

私は大学で週4回授業を受けました。授業は文法と会話、社会見学の3つです。社会見学では週に1回、修道院などを訪れました。ロシアの国教はロシア正教というキリスト教です。礼拝堂はタマネギ型の屋根をしていて、外から見るとかわいらしいのですが、中の壁はフレスコ画であふれ、荘厳な雰囲気漂わせていました。その中で正教徒の方たちがイコンという聖人が描かれた板絵にキスをしていました。彼らの立ち振る舞い方から信仰心の強さが感じられました。

授業がない日には美術館や博物館に行きました。プーシキン博物館というところには、様々な時代の様々な国の美術品が展示してあります。古代エジプトのミイラや古代アテネの像もあります。絵画はモネやピカソ、ゴヤ、ルノワールなど、有名どころが勢ぞろいです。私はここで念願かなって

シャガールの絵を見ることができました。しかし日本人の作品が一つもなく残念でした。

週末にはパーティーもしました。ロシアでは、親しい者同士で開くパーティーを「ベチェリンカ」といいます。ルームメイトの誕生日を祝って、自室で「日本食べベチェリンカ」を開いたことがありました。ルームメイトと一緒に、肉じゃが、豚汁、酢飯、手巻き寿司の具を、ロシアにある食材で作りました。食事をした後に一人ずつ歌を披露したりして楽しかったです。



(赤の広場)

日本にいと、ロシアに関してはテロのニュースばかり耳にしますので、「ロシアは危険な国」というイメージを持っていました。しかし実際モスクワでは、多くの人々が自然と共にゆったりと生活しています。だからこそロシア人はおおらかな性格をしているのでしょうか。このような事実がわかってなんだかうれしかったです。皆さんも機会があれば是非一度モスクワに行ってみてください。



(MGIMO 外観)

アリゾナ大学Bootman 学部長 本大学を訪問

学術交流提携校アリゾナ大学の薬学部長Bootman 教授は9月17-18日静岡市グランシップで開催された第25回日本臨床薬理学会年会（年会長：薬学研究科臨床薬剤学 中野教授）での特別講演のために静岡を訪れた機会に、講演前日の9月17日に薬学部山田教授の案内で静岡県立大学を訪問なさり、廣部学長、辻薬学部長、三輪薬学研究科長と懇談した。なお、Bootman 薬学部長はPharmacoeconomics(薬経済学)分野では国際的リーダーであり、今年会での演題は” The Value of Drug Therapy: Past, Present and Future”であった。

なお、薬学研究科 中野教授は10月末にサンジエゴで開催された生命倫理分野の年会出席の前に10月24-26日にアリゾナ大学を訪問し、Bootman 学部長に会って、多忙な中に静岡で講演してくれたことを感謝し、3-4人の臨床系の教授とも会って臨床教育について意見交換をした。



英国自治体関係者本学を表敬訪問

11月19日、英国自治体関係者訪問団（バーミンガム大学地方自治研修所地方自治学講師、ロンドン議会議員等行政・議会・大学の幹部10人）が本学を表敬訪問した。

特別会議室において、およそ1時間、廣部学長・大野副学長・米津事務局長・稲田国際交流委員長・堀内国際交流委員他で応対した。

本学の現状や日本の大学の現状全般について、自由で活発な意見交換が行われ、有意義な表敬訪問となり、訪問団にも満足して頂けた。



教員の人事

採用

(11月1日付け)

栗田 拓朗 薬学部助手
上平 美弥 食品栄養科学部助手
栗山 孝雄 食品栄養科学部助手

退職

(12月8日付け)

田中 圭 薬学部教授

はばたき寄金からのお知らせ

●学長企画イベント「創造力啓発コンテスト」の入賞者決まる

「創造力啓発コンテスト」は、本学創立15周年記念事業の一環として、廣部学長が企画され始まったイベントで、今年は、1グループの学生からアイデアの提案があった。学長は、提案したグループの全員からアイデアの内容の説明を受けるとともに、提案内容に対するアドバイスなどを行った。学長による審査の結果、本アイデアに対しては初めて特別奨励賞が授与され、その表彰式が10月30日(土)の剣祭初日に看護学部棟で行われた。

(入賞者)

賞区分	提案タイトル	氏名・所属
特別奨励賞	“その時その場所その仲間” 思ひ出を余すことなくお土産にする。 旅ぱっくん	伊藤 岳春、豊辻 絵美、伴 幸伸、 伊倉 千絵、(経営情報学部4年)

●第8回学生文芸コンクールの入賞作品決まる

今年度の文芸コンクールでは文芸部門として、小説、紀行文、詩、短歌、俳句を、また、評論部門(政治、経済、文化など)を募集したところ、文芸部門で17名から21作品(小説6・紀行文3・詩8・短歌4)、評論部門で1作品の応募があった。

はばたき寄金運営委員会委員の先生方などによる審査が行われ、次のとおり入賞作品が決定した。

表彰式は、「創造力啓発コンテスト」と同じく10月30日(土)に行われ、廣部学長から賞状と副賞が贈られた。



(入賞一覧)

部門	賞区分	作品題名	氏名・所属
文 芸	最優秀賞	小説 サヨリ	佐藤 美和子 (薬学部3年)
		小説 僕は、白い少女のために	望月 小羊子 (国際関係学部2年)
	優秀賞	小説 忘却の彼方	森下 美希 (経営情報学部4年)
		紀行文 屋久島紀行	仲上 章子 (経営情報学部4年)
		小説 ハイブリッドレインボウ	森山 裕介 (薬学部2年)
	佳 作	小説 夕日	清水 香予 (国際関係学部2年)
		紀行文 マンハッタン	森下 美希 (経営情報学部4年)
		紀行文 木槿咲く国にて平和を願う	小宮山 令子 (国際関係学部3年)
		詩 しあわせ	滝田 かおり (看護学部3年)
		詩 冬のゆか	海老原 薫 (国際関係学部3年)
努力賞	詩 ひかり	阿部 紋子 (薬学研究科1年)	
評論	優秀賞	ドミニカ共和国経済事情考察と日本の援助のあり方	和田 今日子 (国際関係学部2年)

●第7回学生スピーチコンテストを開催

スピーチコンテストが、10月30日(土)に開催されました。今回は、『少子高齢化社会と私』をテーマに、日本人学生5人、留学生4人の参加があった。

入賞者は次のとおり

[日本人学生の部]

賞区分	氏名	所属
最優秀賞	鈴木 健太郎	国際関係学部1年
優秀賞	森下 克哉	国際関係学部2年
入選	日野 聡一	国際関係学部2年
入選	大高 一人	国際関係学部4年

[留学生の部]

賞区分	氏名	所属
優秀賞	デインチェ	経営情報学部2年
優秀賞	王 燕	国際関係学部1年
入選	王 超群	経営情報学研究科1年
入選	張 劍涛	国際関係学部1年



平成16年度はばたき寄金 寄金者（敬称略）

廣部雅昭、(学生部) 園部尚、関雅典、(附属図書館) 伊勢村護、(薬学部) 辻邦郎、佐藤雅之、山田静雄、(食品栄養科学部) 木苗直秀、中山勉、(国際関係学部) 津富宏、(生活健康科学研究科) 山口正義、(事務局) 米津尚、増田徳好、田畑丈文、静岡県立大学後援会ほか

訃報

田中圭薬学部教授（58歳）が、平成16年12月8日（水）に御逝去されましたので、謹んでお知らせいたします。



(最後のお別れ 12月10日(金)15:00)

【田中圭教授追悼の会のお知らせ】

日時：平成17年1月21日（金）午後1時より
場所：静岡県立大学大講堂

谷田地域の茶もみ唄

有度山（日本平）北麓の谷田地域は、古くからの茶の産地である。いまも県立大学周辺は茶畑が広がっているが、ここの茶は香と味ですぐれている。そして、明治の開国から、海外へも輸出されていった。絹と茶は明治期日本の主要輸出品だったのだが、そのことをいまに伝えているのが、『谷田地方の茶もみ唄』である。

茶もみ唄

はーお茶は始まる
 はーお茶摘みゃ来るナーエー
 (エレソーダーソーダーヨー)

はー今年もな来たかよ
 (ハーコリヤコリヤ)

はー来たかよなえ あの娘
 (ハーモミコメ モミコメ)

はーお茶の出どころは はー安西茶街よ
 はー牛になー 引かせてよ
 はー引かせてナーエー 清水まで

はー清水港から はー蒸気に乗せてよー
 はー明日はなー出船のよー
 はー出船のナーエー かじまかせ

お茶市場がたつ静岡安西の『茶町』から、牛車や人力車に乗せられて清水港に運ばれたのだが、それが、この歌詞にでている。やがて『お茶運搬』のためにつくられた『軽便鉄道』が、現在の静鉄電車になっていた。

その茶を採みながらうたわれていたのが、この唄で、類似のそれは県内各地にあったがいまは殆どうたわれていない。貴重な録音記録となっている。

谷田風土記

有度山麓の麦つき唄

日本平は有度山というが、県立大学がある谷田地区を含めて、『麦つき唄』がこの山麓に残っている。この一带は水が少ないので、麦をつくったが、戦後はほとんど作られなくなり。この唄も忘れられて殆ど消滅寸前である。麦の穂をしごいて白に入れ、これを搗く（つく）のだが、その重労働の苦しさをまぎらわすために歌われたのがこの唄。静岡弁である『よからず』『見ておかず』とか、『麦を』を『麦よ』というのが面白い。なかなか明るく軽快な節である。いまとなつては貴重な唄なので紹介しておきたい。

『有度山麓の麦つき唄』

白金の へりとり白を
 八白ならべて 麦よつく 麦よつく
 八白ならべて 麦よつく

婿殿に着せたい着物は
 茶の葉のついたカタビラ カタビラ
 茶の葉のついたカタビラ
 (スラズント ズント ズント ズント)

夏はよいもの 庭で麦よついで
 エレしのびよづまを唄で呼ぶ
 (スラズント ズント ズント ズント)

なんとこの麦や つけたじゃないか
 エレよさもよからず 見ておかず

お月やちよいと出て 山の腰照らす
 銀のかんざし 髪よ照らす

84

(なお希望者には、このテープを差し上げます)
(国際関係学部教授 高木 桂蔵)

善意ある皆さんの募金ご協力に感謝します。

袋井市の高校3年生、村木理恵さん(18)は、1歳の頃から難病と闘っています。病名は「原発性硬化性胆肝炎(PSC)」「潰瘍性大腸炎」「自己免疫疾患」です。中学2年生の夏、母親がドナーとなり生体肝移植手術を受けましたが、4年が経過した今年の夏に不調を訴え、検査の結果、理恵さんが助かるための唯一の方法は早期の肝臓再移植手術しかないと宣告されました。

再移植手術を受けるための方法は、

1. 日本国内で脳死ドナーからの提供を待つ。
2. 外国に渡り、脳死ドナーからの提供を待つ。

この2つが挙げられます。しかし日本国内では年に2~3人しかドナーが現れず、時間がない理恵さんには期待ができません。そこで海外での移植手術しか助かる道はないという結果になりました。海外での移植手術には資金面の他、様々な事に大きな壁があります。しかし、それを受け止め乗り越えていく決意をし、もう一度肝臓移植手術を受ける決心をしました。

今回の剣祭において、理恵さんがアメリカで肝臓の移植手術を受けるために必要な資金を集めるための募金活動を行わせていただきました。2日間を通して集まった金額は、213,711円で、早速理恵さんのご両親へお渡しすることができました。多くの方の力を借りることができたと思います。本当にご協力ありがとうございました。

(薬学部3年 田中香苗)



● ● ● ● ● ● ● ● ● ● 学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお寄せください。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）あてにお願いします。E-mail:kijo4@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5103）

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>